

五月 中隊復帰

六月 復員のため大隊本部集結

朝鮮經由陸路帰隊

七月 旭川北部二部隊速射砲中隊復員

七月二十日 現役満期除隊

昭和十八年八月 旭川北部二部隊速射砲中隊に召集

九月 旭川北部三部隊にて四十七メートル速射砲大隊編制要員として参加

十月 小樽港出帆

十月下旬 北千島占守島長崎港上陸

昭和二十年十一月三十日 北千島柏原港出帆

十二月七日 沿海洲ナホトカ港上陸

昭和二十一年六月十九日 ウラジオストック收容所到着

七月 ウーゴリナヤ收容所到着

昭和二十二年三月 第十二收容所到着

四月 ナホトカ第一收容所到着

四月十二日 ナホトカ港出帆

四月二十日 舞鶴港上陸(米山丸)

四月二十九日 帰宅

十月まで自宅にて休養

十一月より母の稼業の手伝いをし、後を引き継ぐ。青果物の統制廃止後食堂を始め、平成六年まで営業。年齢的に無理と判断し廃業。

軍隊十カ月 抑留三年

岩手県 松浦 竹治

弘前八連隊に現役兵として入隊して七日目に北満の山^{ザシシフ}神府へ送られたのは、昭和十九年の十月と記憶している。弘前野砲隊ということであるが、長靴でなく地下足袋、竹の水筒という姿で古兵の前に整列したものである。だから、「貴様たちのようなふざけたものが来たのか、

とても話にならない」とすごいビンタがとんできた。

軍隊も末期的な状況がうかがわれ、かつての関東軍の精銳も、気持ちのやり場、うつぶんを晴らす場に困っていたのだろう。

昭和二十年八月ソ連軍が侵入を開始してから、山神府の兵舎を、将校官舎の奥様方の目ぼしいもの、とくに衣類などを出来る限り多く持ちながら南へ南へと逃げたのか、歩いたのか、ハルビン駅へ着いたときは貨車の上だった。

貨車の上で、終戦のお言葉を聞いた。ハルビン駅では満軍の反乱があり、遠く山岳地帯には銃声がこだまし、駅の構内は満軍に占拠されて近寄れないとか、大変な混乱ぶりだった。

上層部はこれからどう行動するか、山岳地帯に入って徹底抗戦するか、このままでは生きて帰れないなど、それこそ真剣に議論されていた。どう結論が出たのか、入隊したばかりの私にはわからないが、貨車から降りるよう命が下り、ハルビン競馬場に集合、「武装解除」となった。

どこをどう歩いたか、思い出すことはできないが、わずかの米を靴下に詰め、腰に缶詰の空き缶をぶら下げて、何日かかったか海林という街についた。徘徊の途中の様子は私の記憶にはっきりと残っている。

日本兵に対する略奪行為で横一列に並べて一人ずつ身体検査。時計、万年筆など目ぼしいものを取り上げる。ロシア人一人の場合もあれば複数の場合もあり、上半身はもちろん靴下まで脱がされた。私も靴のつま先に時計を隠したりして逃れようと努めたが、かつての関東軍も今では丸腰の姿で抵抗する気もないし、気力も体力もない。惨めであった。身体検査、つまり持ち物を取り上げるための検査は、ソ連軍の監視兵が代わるたびに行われたので一日に三回のときもあった。どこへ隠してもみんな見つけられた。彼らは腕から肩まで時計をつけ、これみよがしに自慢してみせる始末。一人で四個も五個も。

どうせソ連軍の手に渡るので、それより出来るだけ持ち出したい。もちろん家へ持ち帰ることまで考えたかはわからないが、前にも書いた山神府の将校官舎か

らの御婦人方の衣類などは、ここまでの途中体力的にも持てなくなり、一つ捨ててから次々と手放して今では何もなく、自分の身体をヨロヨロと支えている程度であった。私なども御婦人の上品な帯を服の上から締めて歩いた。あの暑い満州の原野をと、今考えて馬鹿げたことと思うが、当時の心境を今表現することは無理なことであった。

開拓団の人達、特に婦人達とは途中随分と出会った。学校なのか公民館なのか集会所なのかわからないが、日本女性と子供達も一緒に記憶しているが、道路筋に収容されていた。「兵隊さん必ず迎えに来てね。頑張るから一日も早く来てね」「ああ、すぐ来るから、少しの辛抱だよ」と励ましながら通り過ぎたが、丸腰となった情けなさをどう表現してよいものか。婦人方は坊主になっている人が多かった。必ず迎えに来ると言ったが、そのときは祖国日本へ先に帰れると兵隊の誰もが考えていたのだが、予想だにできなかったことになってしまった。

終戦から満州の広野を缶詰の空き缶をぶら下げてさ

まよった経過のことはここまでとして、次にシベリア行きのことについて思いつくままに述べてみる。

あとで気がついたり聞いたりしたのだが、千人編成で貨車単位だったとのことだが、大半は知らない人達と編成されたようである。一貨物車に一人のソ連兵がついてマンドリン銃を構えて見張っている。「日本兵を無事に日本へ帰すため、事故などのないよう見張りをしているのだ」、交替してくるソ連兵がみな同じように話していた。そう話すように教育を受けたのか、本当にそう信じているのか、今でもよくわからない。中には、「どこへいくのかわからない、私達も途中で交替するからその先はどうも」という良心的と思われるものもあった。

海林を発車、ウラジオストクを経由で船で日本へ帰るといふ。しかし列車は一日中走るときもあれば、午前中走って午後は停車のときもある。停車は夜中が多く昼は走ってる時間が長いような気がした。時計もないし、何時なのか、時間もわからない。太陽が西から出たと騒いだときもあった。いや「満州の北の方を

まわって、満洲里の方から入っていく。この方法が安全だとよ」と勝手な言い方をしながら、列車は進行しシベリアの奥深く進んでいった。

オシッコは貨車の上からでもよいが、大のほうはできない。時にそのための停車があった。林の中から、煙らしいところにとまる。一斉に砲列が始まる。ところが、先に連行された人達とはほとんど同じ場所が多いことに気づいた。一步場所の選定を間違えたら、えらいことになる。子供達も興味深そうに見ているが、誰に見られようとお構いなし。使用した紙を見て、先の人達も同じ方向へ行ったのかと、あきらめの気持ちを持ち始めた。

貨車の窓からスコップで作業をしている人達が見えた。手を振って私達にこたえる風景も見られた。ここはどこで、何というところかも勿論わからないが、シベリアだとは監視兵も教えてくれたし、私達も判断がついた。

「バイカル湖だ」、突然誰かが言い出し、みんなその方向を見た。しばらくして列車が止まった。朝だ。

バイカル湖だとよ、次から次へとリレーされ、疲労の面々も朝のためか明るく見えたりもした。飲んでみたが塩分がない。もちろんだ、いくら広くても海ではないぞ。顔を洗おう。時間もわからないし、朝というだけでそれ以外はわからないが、清涼な水をたたえ、広いなあと今も想いは浮かぶ。東京ダモイ、日本へ帰る夢が完全に断たれたことがバイカル湖でわかった。

タイシエット収容所に着く。バイカルを過ぎて間もなく、タイシエットという名のところで貨車から降ろされた。乗車してから十五日くらいと記憶しているが、一―二日の違いはあるかもしれない。途中シベリア最大の都市イルクーツクを通過したはずだが、誰も知らないままに過ぎたのだろう。軍事機密のためだろうか。

収容所はソ連の思想犯の入っていたところと聞いたが、入れ代わりに彼らは出ていった。お互い無言ではあるが、笑顔で私達を迎えていた。元気で頑張れよという笑顔にみえた。同病相哀れむという気持ちだろうかと感じた。

収容所の建物は丸太を積み重ねたごく簡単なものである。抑留者の方々がそれぞれの記録の中で同じようなことを述べられているので、建物等のことはここでは略したい。

シベリアは大気が凍るのだ。零下四十度になると作業は休む。何故作業を休むのか、それは凍傷になるのを恐れるからである。作業は休みでもストーブの薪よりは交替でやらされる。大きな防寒手袋で火をたきながらの薪とりだが、手が痛くてたき火の効果が無い。零下四十度の厳しさは言葉の説明で納得を得るのは容易ではない。煙は上空に上らず、地上をはう。手を火に押しつけてもその面だけがわずかに感じる程度だ。カンボーイ（ソ連兵）は帽子の耳だれを上げて、「ヤポンスキー（日本兵）寒いのか」と言う。関東軍というって威張っても、寒さで訓練したソ連兵には「とても勝てない」という感じがした。シベリアの寒さを語れば、夏の七月でも氷点下になることがしばしば、十月以降翌年三月いっぱいには平均で零下三十度前後と聞かされた。もちろん零下六十度に達することも稀ではな

い。

作業の状況について若干述べてみると、一番やりたい作業は馬鈴薯の収穫だが、シベリアで馬鈴薯は貴重品であったので、食料不足の中で帰りの際の身体検査が特に厳しい。平たく切って、ベルトの下に並べて隠すもの、靴の爪先に潜ませるもの、あらゆる知恵を絞って持ち帰ろうとするが、門前の検査で取り上げられた。量が多くなると営倉という罰を与えられる。私達の作業の目的はシベリア第二鉄道建設というものであり、それに関連する工事が中心である。そのため大密林を切り開き、道路を造り建設に必要な資材を運ぶ関連作業であったが、この作業に従事する人達の食糧調達（馬鈴薯掘り）も極めて重要な作業であった。

作業によって、比較的軽いものもあれば、肉体的にかなり厳しいものもあり、その区分は以下のような健康診断で区分された。医務室から集合命令があり、医者の方に背中をむけさせ、尻をみて尻の皮をつまむ。たるみを見て一級から四級まで区分する。それによって来週からの作業を決める一瞬である。医者は、私の

収容所は男であったが、女の医者が多いと書いている本もあり、女医は敵しかったという人が多い。

作業監督と看守兵について、ソ連では一定の作業（ノルマ）を完全にやらせる責任のある者と、人員を確実に掌握する責任ある者とが区分され、私達の作業に必ず両者がつきまとっていた。夕方時間がきてもノルマが出来ないと作業監督はイライラして早くやれと責めまくる。人員責任の方は、さあ帰ろうよとなる。

暗くなると、人員確認が困難となり、心配なのだ。二人で口論となり、人員確認の方が勝てばよいと思っているが、大抵は作業確認が勝つ場合が多い。

コルホーズについての思い出。私はどうした経過でコルホーズに行ったか今もって思い出せないが、約二週間くらい草刈り作業をしたことがある。静岡県の大場与四郎さん達と七人だったと記憶している。しばらくぶりに明るく娘たちと接したので、その話をしたい。

「ズドラストイッチ（こんにちは）」と声をかけてくる。その表情からは、日本人だからという差別は全

く感じられず、明るく、素直であった。彼女たちは、バラック建ての粗末な宿舎に泊まっていた私達の所に朝早くから遊びにきたり、会館でダンスパーティーをやるか迎えにきて、一緒に踊って楽しんだりした。もちろん私達はダンスの真似だけだったが、とくに彼女達を喜ばせたのは日本人の箸の使い方だった。食事（馬鈴薯のスープ）時、窓にはいっぱいの人達が寄ってたかって室内の私達を眺めている。箸を上手に使う方法を教えろと言う。いくら教えても、すぐ上達するものは少なかったようだ。戦勝国とはいっても日常生活にも困る、日本から略奪した軍服を着ているような中で、底抜けに明るい。コルホーズの人達に接して、ここでは一時でも楽しかった思い出が残る。人間はどこも気持ちは一緒なんだという気がした。

シベリアには大河が多い。バイカル湖に注ぐ河なのかどうかはわからないが、日本の河川と違い、広いものが数あったと思う。

抑留者の誰もが食糧不足を書くが、とにかく食べられるものは何でもよいのである。話題は故郷の話、と

くに食べもの話など。餅の種類は東北が断然多かった。

向こう岸に山ユリの群生があり、作業の合間に泳いでユリ根掘りということになった。食べたいのは誰よりもだが、約三〇メートルをスコップを頭に載せて泳ぐことはできない。私は体力はないし泳ぎはまるで駄目だった。静岡の大場さんはすいすいと泳ぎ、ユリの根を山ほど掘ってきて食べさせてくれた。なによりも食べ物が一番であり、五十年の歳月を過ぎて今なお彼とは文通や贈物で交流が続いている。

虱と蚊とブヨと南京虫に悩んだ。作業に出掛けるときは蚊張つきの頭巾を頭からすっぽりかぶり、手に手袋をして肌を出さないようにするのだが、ものすごい群で襲ってくる蚊やブヨには泣かされた。南京虫と虱は収容所内部で待機している。疲れた身で宿舍に帰れば南京虫がゴソゴソと真っ赤に充血して待っている。私は寒さよりもこの虫達で泣かされた。

何から書いてよいかと思うほどシベリアの思い出は多い。人生七十五年になろうとするとき、わずか三年

のシベリアがなぜ記憶に残るのか、やはり筆舌に尽くせぬ苦勞をしたからだろうか。戦争が終わったのに連行された、どうしても理解し難い行動からだろうか。いや両方だろうと思う。

引揚げの町舞鶴を訪ねた。京都国体で岸壁の母が行進曲になったこと、引揚記念館が建設されたことが新聞に報じられたので、思い出の港、舞鶴へと平成元年八月、妻と共に訪ねた。御苦勞様と言われながら上陸の第一歩を踏みしめた平の棧橋も今はなく、当時を物語る建物はほとんどない。

舞鶴港が一望できる五老ヶ岳に登った。入り江が幾重にも入りこんで、その奥に上陸棧橋跡の標柱が白く見えた。

記念館には、八百点上るという全国から寄せられた遺品の数々が当時をしのばせていた。抑留者も年とともに消えていくが、この記念館は原爆の広島平和記念資料館と並んで、「戦争と平和」を後世に語り伝え、歴史の証人として意義を高めていくことだと感じた。

シベリアといっても若い世代はその意味もわからな

いし、理解も薄れがちの時に、京都国体の行進曲に「岸壁の母」が、そして舞鶴に「引揚記念館」ができたことは、非常に感銘した次第である。舞鶴市はもちろんのこと、全国からの協力によって建設されたとのこと。関係者の努力に対し、今更ながら謝意を表したいと思う。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十三年一月七日

入営前の職業 小山産業組合 徴用で横須賀海軍工廠

復員 昭和二十三年八月

復員後の職業 昭和二十三年十二月 小山農業協同組

合

昭和二十六年 岩手県経済連

昭和六十年 胆沢町農協理事

(岩手県 田辺 壮久)

戦闘・シベリア抑留

岩手県 安倍 庄吉

入隊、新兵時代

昭和十九年徴兵、現役証書は大阪集合命令書であった。岩手県南、奥羽山系、熊の出没する山近くの片田舎より現役の兵隊として出立したのは昭和十九年一月十三日、零下十度以上もある雪の降る寒い夜、歓呼の声に送られ水沢駅を大阪まで直行の臨時列車で出発した。若柳村から歩兵一八一部隊へは内田敏男、那須隆、安倍吉郎、土井今朝治、砲兵二三六部隊へは私人だったので寂しく感じた。同年兵は全部岩手出身者で、歩兵と砲兵合わせて千五百人くらいと思われた。十六日、集合場所は兵舎ではなく大阪の本願寺別院で、初年兵受領に来たのは一大隊の長野亘中尉を長として、萩原准尉と神崎軍曹が私の中隊受領員であった。ここで歩兵一八一部隊と野砲二三六部隊に分けら